「石垣原合戦」余話

原町（会員）坂石　要

一、足手荒社のこと

慶長五年（一六〇〇）九月九日豊臣方についた大友義統は海路、浜脇浦に着船し、直ちに立石に布陣した。旧臣、宗像掃部は御堂ヶ原に、吉弘統幸は坂本に着陣し、大友義統の本陣を中心に鶴翼の布陣ができあがった。

一方、徳川方の松井佐渡守は九月十二日木付城を出発し、同日夕刻実相寺山と角殿山に布陣した。のち双方ともひそかに偵察者を出して、それぞれの戦力や軍備などをさぐらせて勝つための作戦を練った。

同十二日の夜半のことである。坂本（現杉乃井ホテル東側の台地上の公園付近）の吉弘統幸陣営の不寝番の侍たちが、崖上から落下したような大きな物音を聞いたので直ちに崖下を捜索し、付近の民家に隠れていた松井軍の偵察侍一人を捕まえた。

尋問すると吉弘陣営の様子を探るため、崖をよじ登り偵察後下りる際、足を踏みはずして転落し、手足を骨折したという。それ以外の尋問には答えず、ただ無念の歯ぎしりをするばかりである。しばらくして「拙者は黒田方にさる者ありと知られた者じゃ。もし手を挫かずば、お前共の手に掛かる者ではない、首をはねて手柄にせよ。死して百世の後まで魂はこの世にとどまり、手足を挫いた者を救うであろう」といい残して斬首された。

吉弘統幸はこれを憐れみ、河原端に手厚く埋葬した。以後、手足を挫いた者が参詣すると不思議に治癒するので祠を建て「足手荒社」として崇めたという。

二、ひとりの落武者

石垣原の合戦のはじまりは九月十三日（旧暦）巳の刻（十時頃）とか午の刻（十二時頃）であったなど史料によって違いがあるが、「双方残ラズ掛リ合ヒ討死多シ」という激戦であった。結果は大友方の大敗となり、生き残った敗軍の武士たちは、それぞれひそかに生きのびる手だてを探した。

その一人原辰光という武士は、左肩に深手を負い、その痛みに耐えながらもムカサコ（現上人町）へと急いだ。大友方へ味方するのに乗ってきた小舟を繋いでいたからである。

しかし、舟は潮に流されたのか姿を消していた。辰光は

最後の気力をふりしぼって潜伏する地を求め、隠迫（かくれさこ）の農家にしばらくかくまわれることになった。のち傷の癒えた辰光は、旅僧姿で石垣原の激戦地をめぐり、討死した武士たちの霊を弔いながら遺品などを蒐集して隠迫に草庵をつくり、「西光」と名のってここで供養したと伝えられる。現存する数基の五輪塔は、その供養塔でもあるという。

元禄七年（一六九四）別府を訪れた貝原益軒は「石垣原は古戦場なるゆへ雨夜には今も往々鬼哭するよし、里人いへの矢の根（矢じり）かうがい（口蓋骨、鼻の骨のこと）など時々此原にて拾い得ることあり」と合戦後の石垣原の不気味さを、その著『豊国紀行』に記している。

三、姥ヶ塚

石垣原合戦の勝敗は慶長五年九月十三日に決し、翌十四日大友義統は黒田如水の軍門に降った。そして、捕われの身となった義統は如水の本拠地であった中津へ護送された。

一方、戦勝した黒田方の武士団は、それぞれ意気揚々と引き揚げはじめた。その中の一団は、亀川経由で帰郷するため隊伍を整え現在のイトーピア（大観山町）より板山道を通っていた。

その時一人の姥と出会った。姥はせまい山道であるため道端にたたずみ、武士の通りすぎるのを待ちながら、なにやら小さな声でつぶやいた。このつぶやきを聞いた一人の武士が瞬間、抜刀して一刀のもとに切り捨てた。姥はかすかに悲鳴をあげたのみであった。

侍頭がくだんの武士に、その理由を問いただしたところ「黒田が負けたか？」と姥がつぶやいたのが聞こえたので、許さなかったと答えたという。亀川村の人情に厚い里人たちは、どこの者ともその名も知らない姥を心より憐れんで、道端に土盛りをして手厚く葬った。そして里人は「姥ヶ塚」と呼んで命日には草花を手向けたという。

姥こそ合戦に全く関係のない、かわいそうな犠牲者であった。石垣原合戦の被害については「兵火により古記録などが焼失した」と口伝されている社寺もあるし、伝来されてない被害も多いにちがいない。平和ほどしあわせはあるまいと考えている。

（参考ー編集部）

「豊国紀行」について—貝原益軒が元禄七年春、幕府の許可をもらい豊前・豊後の史跡調査を行なった。当時の別府地方を研究する上で貴重な文献の一つである。経路は頭成（豊岡）—亀川—平田を経て、鉄輪の各地獄を回遊し北石垣・中石垣・南石垣を通って別府村で一泊している。